

千歳の歴史的建築物調査②

## 湖畔の赤い三角屋根

― 国内第一号のユースホステル ―

中村 康文

千歳市総務部主幹付主査

(市史編さん担当)

### はじめに

支笏湖を見下ろす木立の中に、北欧の山荘をイメージさせるような支笏湖ユースホステルの旧館がある。

現在は老朽化が激しく、赤い屋根の色もすっかり剥がれ落ちてしまっているが、かつて「赤い三角屋根」は支笏湖のシンボリックな存在だった。

支笏湖ユースホステルは、昭和三十年、支笏湖小学校の旧校舎を改修して、日本ユースホステル協会初の専属施設として開業。それから五年後の昭和三十五年七月、全面改築した現在の旧館「赤い三角屋根」が国内の直営ユースホステル第一号として竣工した。設計したのは北海道を代表する建築家田上義也だった。

田上は、道内各地にユースホステルのほか、著名人の私邸、博物館、学校、銀行等を残し、多くの人があるその建築を研究している。また、その作品が時代の流れとともに取り壊し建替えられて姿を消していく中、旧小熊邸に代表されるように、市民が存続を求め保存再生への運動が起こるなど、歴史的建築物として評価が高い。



写真-1 現在の支笏湖ユースホステル旧館

支笏湖ユースホステル旧館も、存続そして活用のために動き始めている。今年四月、三角屋根の有効活用を考える会「屋根裏の会議室」が支笏湖ユースホステルで開催された。建築の専門家、ユースホステル愛好者など十八人の有志が意見交換をし、その席では、四月から二十一年ぶりにペアレント（ユースホステルの管理人）に復帰した吉川悦子さんも「赤い三角屋根」への思いを語った。

千歳に住み、幾度も支笏湖畔を訪れ三角屋根に目を留めることはあっても、日本ユースホステル協会初の直営施設、著名な建築家の作品ということを知る人は少ない。

この歴史的建築物について、また、設計者の思いや施設の存続を願う人たちについて紹介する。

## 一．ユースホステルの歴史

ユースホステル運動の発祥はドイツである。産業革命以降、特に工業地帯では煤煙、炭塵、排気ガス等による環境悪化が激しかった時代、ルール工業地帯の近くで小・中学校教師を務めていたリヒアルト・シルマンが、子供達を自然豊かな野外へ連れ出す「長期にわたる遠足」をさせてやりたいという思いから始まった。ヨーロッパを中心に広まり、日本では、昭和二十六年、日本ユースホステル協会が創設される。

ユースホステルは、青少年に、自然の偉大さを知り愛護し保護することを薦め、世界各地の文化的価値を認識させることにより、青少年の教育を促進すること、そしてホステルに泊まることによって互いに仲間としてよりよい相互理解を深めることを目的として、国内三二〇箇所、世界各地に四〇〇〇個以上の施設を運営する、世界最大の宿泊施設ネットワークである。

北海道ユースホステル協会が設立されたのは、昭和三十年。全国の都道府県協会の中で一番早い発足であった。

発足時の会長は福山甚三郎(当時・北海道レクリエーション協会会長)、副会長に石附忠平(当時・北海道教育評論社長)、木呂子敏彦(当時・北海道教育委員会委員長)、専務理事は現在の支笏湖ユースホステルのペアレントである吉川悦子さんの夫・吉川英一である。

当時、北海道青年団体協議会の事務局長であった吉川英一と、北海道教育委員会委員長の木呂子敏彦は、互いに青年運動に関わっていたことからユースホステル運動で意気投合し、協会創設に尽力することになる。

その後吉川は、昭和四十四年まで協会の専務理事、四十五年から四十八年までは副会長を務め、支笏湖ユースホステルをはじめ、道内のほとんどのユースホステルの設置に関わる。

## 二．建築家 田上 義也

田上義也は、明治三十二年、栃木県那須野原で生まれ、小学校高等科一年を終了するころ東京に移り、青山学院中等科へ入学する。早稲田大学理工科に在籍していたとこの田上幸之助の影響により建築に興味を持ち、夜間の早稲田大学附属早稲田工手学校に入学し、昼は青山、夜は早稲田に通っていた。大正五年に工手学校を卒業した後は、早稲田大学理工科を目指し、夜間は早稲田高等学院で勉強し、昼は逓信大臣官房経理課管繕係で建築助手として働いていた。

そして大正七年、田上は、帝國ホテルの建築事務所が建築家を募集する新聞広告を見つけた。「英語を話せる若い建築家を求むーライト」に応募し採用される。そこで世界的に有名なアメリカ近代建築の巨匠、フランク・ロイド・ライトと出会い、帝國ホテルの設計に参画しながら、ライトに師事することとなる。

大正十二年、帝國ホテルが完成し、九月一日午後、竣工披露式が予定されていた。しかし、午前十一時五十八分、関東大震災が起こる。

帝國ホテルは無事だったが、これを機に田上は、同年十一月、単身で北海道に渡る。当時二十四歳。



写真-2 田上 義也 (1899 ~1991)

田上と交流のあった現・支笏湖ユースホステルペアレントの吉川悦子

さんは、田上から、「ライトと共にアメリカに渡ることも考えたが、野付半島の風倒木の景色を見て、北海道定住を決めた」と聞いている。その思いについて、小山一男著『北のまればと』によると、根釧原野を訪れ、北海

道という想像以上に未開の地で、極寒の自然と闘う開拓民に感動し、雪や寒さに負けない住宅建築を確立する意欲に火がついたようである。

戦前、札幌を中心に小樽や函館に、多くのモダン住宅の設計を手がけ、戦後は、学校や銀行、ユースホステル、美術館や図書館なども設計している。

代表的な作品としては、昭和二年に建てられた北海道帝國大学（現・北海道大学）農学部的小熊榎教授の私邸で、現在は藻岩山の麓に移設され「ろいず珈琲館」（写真・三）という喫茶店となっている。その他、国指定登録有形文化財に指定された函館市の旧佐田邸や、札幌北一条教会、網走市立郷土博物館（写真・四）などがある。『千歳市史』の編著者である更科源蔵の私邸も含まれ、田上が文化人との交流が深かったことも知られている。



写真-3 ろいず珈琲館（旧小熊邸）

約七十年間で、道内各地に多くの建築作品を残し、昭和三十九年には日本ユースホステル協会功労者賞、翌四十年には北海道文化賞、五十三年には北海道開発功労賞などを受賞している。

また、昭和四十五年に前会長急逝の後を受け、北海道ユースホステル協会会長に就任するほか、北海道国際文化協会会長、日本建築家協会北海道支部長、札幌市教育文化財団理事などの公職にも就いていた。

平成三年、九十二歳で永眠している。



写真-4 網走市立郷土博物館

で全焼した。

- ・佐田邸（現・プレイリーハウス）昭和三年竣工 函館市（国指定登録有形文化財）
- ・旧北見教育会網走博物館（現・網走市立郷土博物館）昭和十一年竣工 網走市
- ・札幌北一条教会 昭和二年竣工、昭和五十四年移転新築 札幌市
- ・北湯沢ユースホステル 昭和三十七年竣工 平成七年解体新築 伊達市
- 《現在も営業しているユースホステル》
- ・支笏湖ユースホステル旧館
- ・美幌ユースホステル
- ・摩周湖ユースホステル
- ・オホーツク小清水ユースホステル
- ・サロマ湖畔ユースホステル
- ・室蘭ユースホステル

◎田上義也氏による道内の主な建築物

- ・旧小熊邸（現・ろいず珈琲館）昭和二年竣工、平成十年に解体移築 札幌市
- ・坂牛邸 昭和二年竣工 小樽市
- ・坂邸 昭和二年竣工 小樽市
- ※中山美穂主演の映画「ラブレター」のロケ地として有名。小樽市指定歴史的建造物であったが、平成十九年五月二十六日に火事

### 三、支笏湖ユースホステルの歴史

昭和三十年、北海道ユースホステル協会は、他の都道府県協会に先駆けて設立され、全国のモデルケースとなることが期待されていた。

「北海道ユースホステル運動二〇年史」によると、昭和三十年三月、同協会の常任理事会において、道内五施設がユースホステルとして決定され、日本ユースホステル協会へ指定通知が提出されている。その中には支笏地区から丸駒温泉が認定されている。収容人数は五十名、宿泊料金百五十円、朝夕食の米持参で三百円であった。

昭和二十九年、現在のユースホステルの場所にあった支笏湖小学校（昭和二十四年開校）が現在地に新築移転した後、旧校舎の払い下げを受けて改装し、昭和三十年、国内最初の専属ユースホステルとして開業した。

当時のペアレントを務めていたのは、現在のペアレント吉川悦子さんの両親である木本夫妻であった（写真一五）。



写真一五 発足当時の支笏湖ホステル。左右が木本ペアレント夫妻（北海道ユースホステル協会提供）。

「夫の英一は北海道ユースホステル協会の専務理事を務め、その後の道内のユースホステルのほとんどの建設に関わっていました。札幌に住んでいましたが、両親が運営する支笏湖ユースに手伝いに来ていました。学校だった最初のホステルは、二つの教室を宿泊する部屋として

使い、職員室をペアレントの部屋として使っていました。一室に五人から六人泊まれたと思います」と悦子さんは振り返る。「日本ユースホステル運動五十年史」には、次のように記されている。

二つの教室を男女別の寝室に分けて床に畳を敷き、廊下と水飲み場を洗面所と炊事場に改造し、教職員室を管理人室に改造している。風呂は釜の下から直接火を焚く五右衛門風呂であった。寝室にカーテンを架け、三十組の布団を用意し、炊事用具を整えると、総費用は予算をオーバーして六十万円（募金三十万円）になった

それは、ユースホステル運動の創始者シルマンが、大勢の子供達が遠くまで旅に出かけられるためのネットワークとして、学校の校舎を宿泊施設にと発想したのと重なる。

しかし、旧校舎の老朽化は深刻なものだった。「北海道ユースホステル運動五十年史」によると、

支笏湖の千歳小学校支笏湖分教場旧校舎の払い下げを受けて山口氏、吉川氏などが十万円ずつ出し資金を集め三十万円を用意、急改造したもので、相当古い施設で、吉川氏の話によると、傾きを防ぐための支え棒が何本もあり、改造によってわずかに体裁を整えただけのものであったが、土台が腐っていたため結局六十万円もかかり、三十万円の赤字が出てしまった。家屋はただでも、当時の六十万円は大変な金額であった。支笏湖YHは日本最初の専属YHとなった。その意味では貴重な施設である。

と書かれている（註・一）。

その後、田上義也による設計のもと、全面改築が進められる。

昭和三十五年七月、全国競輪施行者協議会からの補助を受け、「赤い三角屋根」が完成した。

支笏湖の自然環境に調和した、欧州風のモダンな建物は、日本ユースホステル協会直営として第一号のユースホステルとなった。

昭和三十五年から三十六年にかけて支笏湖では、全国レベルの大きな



写真-6 昭和 35 年当時のパンフレット（発行：千歳毎日新聞社）



写真-7 ホステラーの集い（昭和 53 年 9 月・北海道ユースホステル協会提供）

行事が相次いで開催された。竣工直後の昭和三十五年八月に全国レクリエーション大会。翌三十六年五月二十二日には、天皇后両陛下ご臨席のもと、第十二回植樹行事及び国土緑化大会が開催され、同年八月十一日から十二日には、第三回国立公園大会がモラップで開かれた。

また、このころ、市が湯元権利を取得し一括し

て支笏湖周辺の温泉開発をすることとなり、各地で温泉掘削のボーリングが行われ、昭和三十五年十一月三十日、オコタンで撰氏四十五度、毎分一〇秒の湧出に成功し、その後の観光開発の見通しが明るくなったところであった（註・二）。

国内のユースホステル利用者は、昭和四十年代中頃から五十年代初めにピークを迎える。支笏湖ユースホステルも昭和四十六年から四十九年には、年間宿泊者数が二万人を超えている（表・二）。

「当時、ホステラーに出す一番のご馳走はヒメマスでした。建物の前に木のテーブルを置いて、屋外でのジンギスカンもやりました。気持ちが良いと喜ばれました」と吉川悦子さんはその頃を語る。

昭和五十六年には、本館と渡り廊下で繋がる別館が建設された。研修施設としての機能も備えたことから、宿泊者の少なくなる冬期間にも、近郊から多くの小中学生が利用することとなった。

しかし、徐々に宿泊客は減少し、平成五年度には一万人台を割り、平成十六年度は二千人



写真-8 櫻内日本ユースホステル協会会長との懇談会（昭和 57 年 8 月・北海道ユースホステル協会提供）  
前列左から二番目田上氏、三番目櫻内氏、四番目東峰市長。

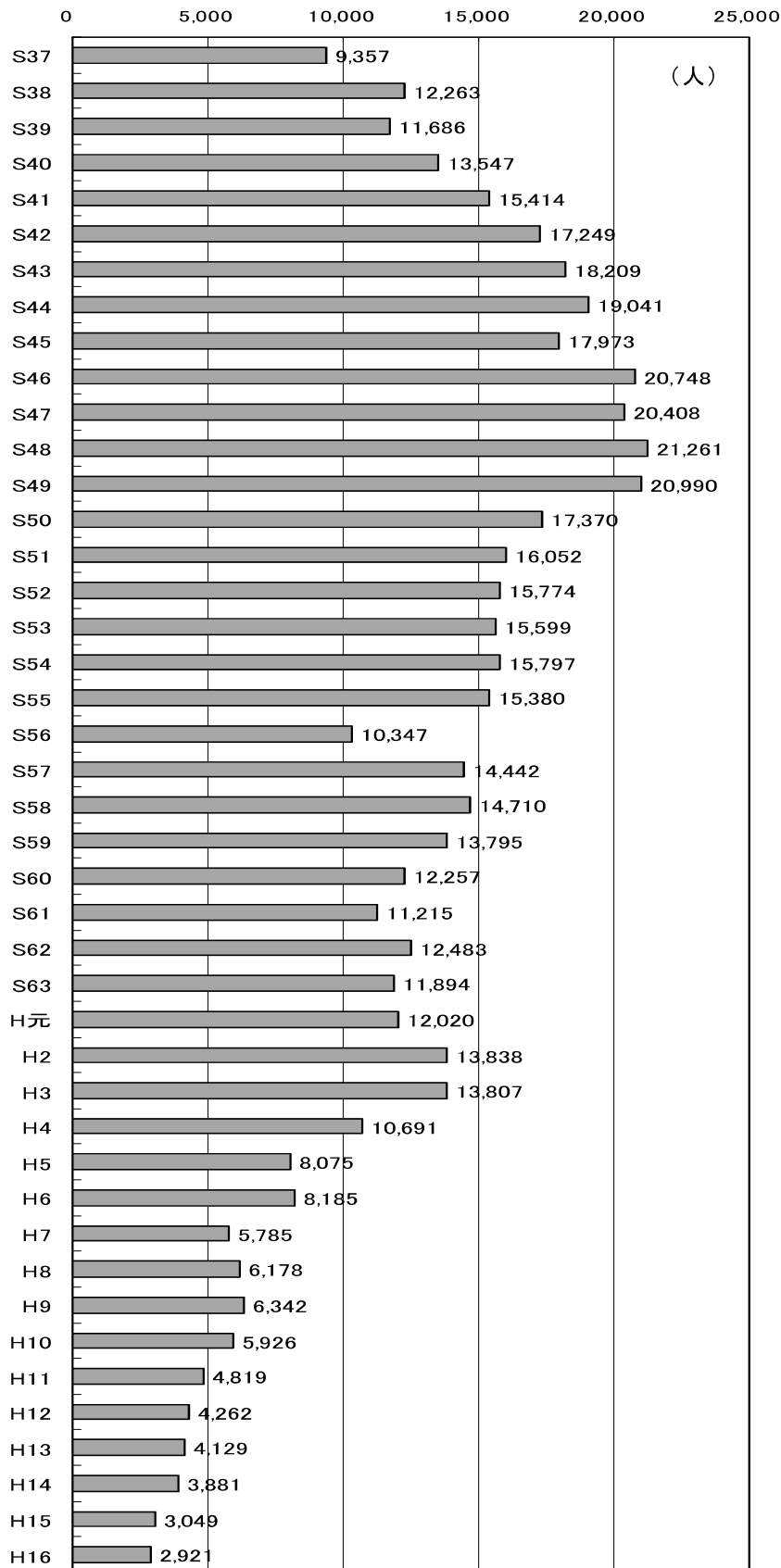


表-1 支笏湖ユースホステル年度別宿泊実績  
(北海道ユースホステル協会資料)

台となっている。(表-1)

日本ユースホステル協会による運営は、直轄から委託という形態に移  
行し、現在、道内で直轄により運営されているのは北湯沢ユースホステ  
ルのみとなっている。支笏湖ユースホステルも平成十六年度から、地元  
のNPO法人「支笏湖まちづくり機構Neoステージ」に運営が委託  
されたが、宿泊客の減少が続き、平成十九年三月に撤退するに至った。

#### 四. 建物の特徴

建物のもっとも特徴的なのは、やはり赤い三角屋根である。  
「支笏湖畔に入ってきて、まず左手に赤い三角屋根が目に入る。シン  
ボリックな存在だった」と吉川悦子さん。急勾配の屋根は、田上が確立し  
た「雪国の造型」が意識されている(註-三)。  
木造二階建、延べ床面積五九八・〇三平方メートル。建物の平面は十字体系  
で、出入口側はピラミッドのような三角の顔になっており、急勾配の屋



写真-9 北湯沢ユースホステル（平成7年解体・北海道ユースホステル協会提供）

根が地面まで伸びている。内部は、白い壁を窓枠や柱、梁の濃色な木で引き締め、食堂のカウンターやホール中央の吹き抜けに吊されているランプなどのアンティークな照明器具もモダンで趣がある。ホールの中心には二階へ昇る螺旋階段がある。螺旋階段を昇りながら見上げると、三角屋根の頂点までの吹き抜けが開放感を与える。同じく

田上が設計した、旧北見教育会網走博物館で現在の網走市立郷土博物館の螺旋階段も同じ形状である。

宿泊室にはユースホステルに欠かせない二段ベットが両側に設置され、大きな窓からいっばいの日差しが取り込まれている。

田上はユースホステル設計への思いについて、支笏湖ユース完成の二年後、昭和三十七年六月に完成する、同じく赤い三角屋根の北湯沢ユースホステル（写真・九）の設計について、次のように述べている。

設計は環境順応しつつ、さらに環境を衝動して「その風土と共に呼吸する」と云う私の考え方を、このホステルは意図しているのです。（中略）その中心の後部から、高く碧空を切って突き上げて無限を思はせる切妻の環境を衝動

している。（中略）この作品は支笏湖ユースホステルのピラミッド型の一環としてのヴァレーションで、若く新鮮なホステラーの魂を生きと発映せしめる、北方的な造型として、南条先生（註・四）の精神を盛ったものである。

他の田上により設計された道内のユースホステルの外観を見てみても、周辺の自然環境への調和にこだわりを見せている。

イタンキ浜を一望する高台に建つ室蘭ユースホステルは、全体の形状、ダクトや円形窓など船をモチーフにした特徴的なデザインである。オホーツク小清水ユースホステルは、多くの野鳥が生息し、初冬にオオハクチョウが飛来する瀟沸湖の近くに建ち、白鳥が飛び立つようなイメージでデザインされている。平成十一年九月に閉館し取り壊されているが、札幌宮ヶ丘ユースホステルはサイロの形が特徴的だった（写真・十）。

田上は、昭和四十五年から六十二年まで北海道ユースホステル協会の会長を務め、ユースホステル運動に尽力する。

ユースホステルの設計には、住宅やその他施設への発想に加え、若者達の情熱や希望に満ちた未来をイメージした青少年育成への思いが込められている。



写真-10 札幌宮ヶ丘ユースホステル（平成11年解体・北海道ユースホステル協会提供）

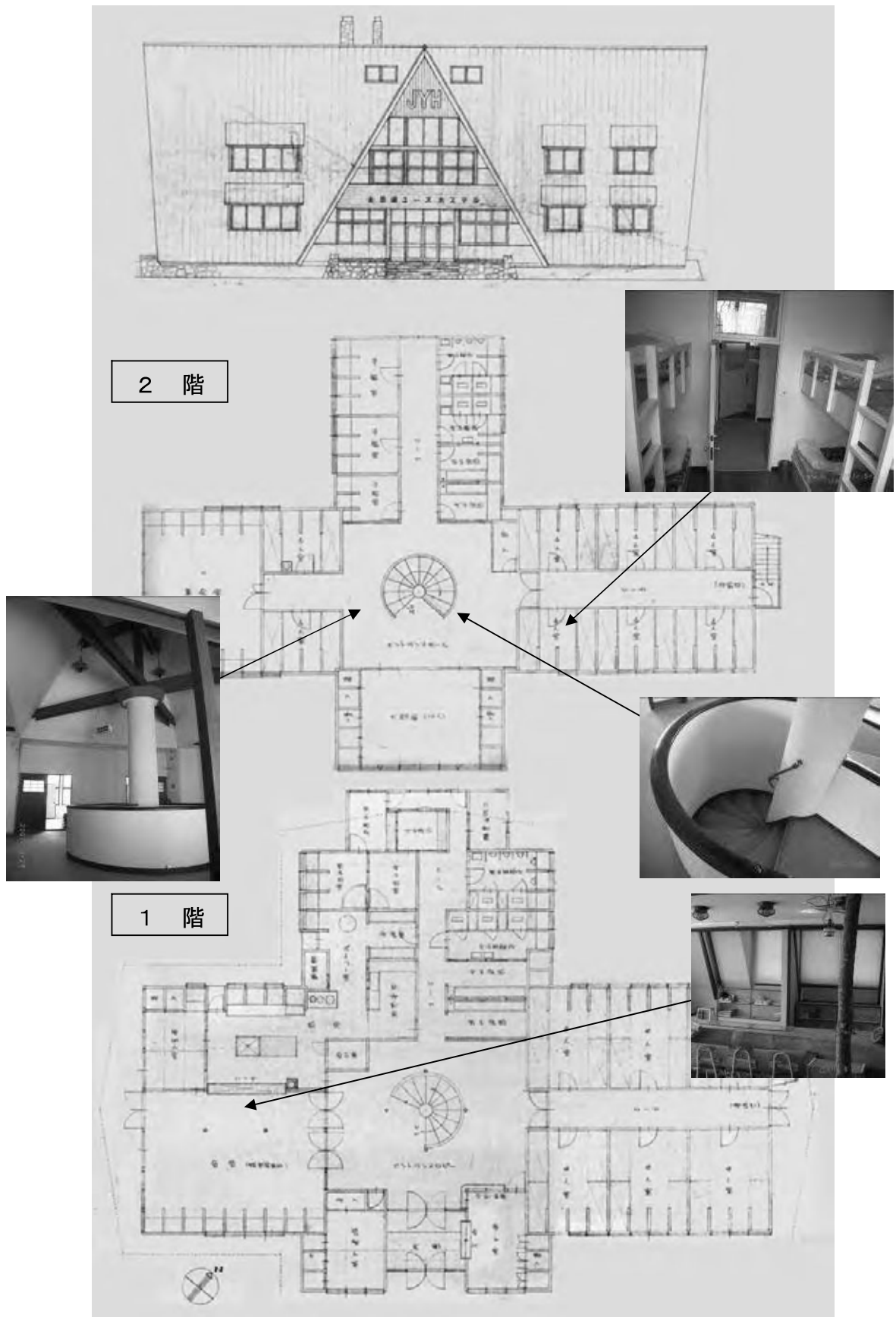


図 - 1 田上義也直筆の「支笏湖ユースホステル新築設計図」(支笏湖ユースホステル所蔵) から抜粋し、現在の館内写真を貼付



## 五、歴史的建築物を残す動き

今年四月から、吉川悦子さんは二十一年ぶりに支笏湖ユースホステルのペアレントを七十五歳で引き受けた。両親が日本初のユースホステル専用施設であった支笏湖小学校旧校舎時代からペアレントを務め、昭和四十六年にその後を引き継いでから六十一年三月に体調を崩して退くまで十五年間を務めた。昨年九月には、長年ユースホステル運動推進に身を注いできた夫の英一氏が逝去された。

悦子さんのユースホステル運動、「赤い三角屋根」存続への思いは強い。二十一年前に退いた後も、支笏湖を訪れるたびに赤い三角屋根が色褪せていく様を見ては、胸をかきむしられる思いだったという。また、ユースホステル発祥の地であるドイツのアルテナ城ユースホステル記念館（アルテナ城は世界最初のユースホステルで現在も利用されている）を訪れ、館内で日本の第一号ユースホステルとして紹介されていたのを目にし、「世界に恥じない建物として、後世に残さなければならぬ」と心に誓ったという。

屋根も壁も色褪せ、天井も床も傷みが激しい「赤い三角屋根」は、早い段階での修復が求められている。宿泊施設として使えるまでに再生するには困難な状況であるため、その他の有効活用について模索中である。同じく田上が設計した建築物の存続運動には、平成七年から協議が始まった旧小熊邸がある。保存のための市民運動は約六千三百名分の市民の署名を集めたという。平成九年に移築保存が決定され、平成十年、札幌藻岩山の麓に喫茶店として再生した。

また、室蘭ユースホステルもペアレントの呼びかけから、商店街、町会、市議会議員、商工会議所、観光連盟などからなる支援グループ「守り育てる会」が結成され、募金活動や市、企業などの協力を得て改修し

存続を果たしている。

今年四月二十一日、支笏湖ユースホステルに大学教授、建築事業者、学生、市観光連盟職員など十八人が集まり、「赤い三角屋根」の有効活用アイディアや傷み具合・改修方法について意見交換がされた。コンサート会場やギャラリーなど支笏湖を訪れた人や地域の人たちへの開放など、ペアレントと賛同する有志たちによって、支笏湖のシンボル「赤い三角屋根」再生の検討が始められている。

意見交換の場に参加し、ユースホステルにも初めて泊まった。ただの「安い宿」との違いは、宿泊者が集う交流の場所があること。

ユースホステルの父シルマンは、「自然を愛し、団結する喜びの中に世界を歩き、お互いが助け合う精神の中で、よりよい個人が生まれ、役立つ人間が完成する」と書いた額を家の中に掲げていたという（註・五）。

人間関係が構築できず、青年による「いじめ」や自殺、家族の殺傷事件などが多発する昨今、人とふれあい、自然とふれあう機会は重要である。支笏湖ユースホステルは絶好の自然環境に囲まれ、青少年の健全育成のシンボルとしても期待したい。

（文中敬称略）



写真-11 改修が必要な支笏湖ユースホステル旧館

本稿の執筆にあたり、支笏湖ユースホステルの吉川悦子、吉川英之両氏、北海道ユースホステル協会事務局長中村誠氏、網走市立郷土博物館から貴重なお話、写真・資料をご提供いただきました。改めて厚くお礼申し上げます。

## 註

註・一 「YH」はユースホステル、「山口氏」は当時の道協会理事・北海道青年団体協議会委員長の山口良明、吉川氏は吉川英一。

註・二 『増補千歳市史』八三四〜八三五頁より。

註・三 「雪国的造型」は南面を大きく開口し、垂直性を強調する南面から北側に大きく屋根を吹き下ろす形態。単純に形態だけでなく、敷地の正しい認識と生活を生き生きと表現する建築であること、造型とは美と技術の両面から達成されるべきと唱えている（角幸博・越野武著「建築家田上義也の戦後の建築活動」より）

註・四 「南条先生」とは、昭和三十四年に日本ユースホステル協会の会長に就任した北海道出身の元建設大臣、南条徳男氏である（北海道ユースホステル運動二十年史」より）。

註・五 「日本ユースホステル運動五十年史」より

## 参考文献

井内佳津恵 昭和十四（二〇〇二）年 『田上義也と札幌モダン』

ミュージアム新書

角幸博 平成十一（一九九九）年

『建築家田上義也（一九九〇〜一九九一）の戦後の建築活動』

日本建築学会大会学術講演梗概集

平成十（一九九八）年 『田上義也と雪国的造型を求めた北の建築家』

月刊・住宅建築 建築資料研究社

小山一男 昭和五十二（一九七七）年 『北のまれびと』 現代出版社

財団法人日本ユースホステル協会 平成十三（二〇〇一）年

『日本ユースホステル運動五〇年史』

財団法人北海道ユースホステル協会 平成十七（二〇〇五）年

『北海道ユースホステル運動五〇年史』

財団法人北海道ユースホステル協会 昭和五十（一九七九）年

『北海道ユースホステル運動二〇年史』

千歳市 昭和五十八年 『増補千歳市史』